

1 インド支配の経過

英仏抗争とイギリスの勝利

← イギリス ← **東インド会社** → インド

●貿易拠点を建設
(ボンベイ・マドラス・カルカッタ)

フランスとの対立激化 (仏デュプレクスの活躍)

1757 北インド 1744~63 南インド
ブラッシーの戦い・カーナティック戦争
(クライブの活躍)

↓
イギリスの勝利

イギリスの侵略

← イギリス ← **東インド会社** → インド

●侵略の進行

マイソール戦争 (4回 1767~99) …南インド支配

マラータ戦争 (3回 1775~1818) …デカン高原支配

シク戦争 (2回 1845~49) …パンジャブ併合

イギリスによる植民地化とインド社会の崩壊

18c後半 **産業革命の進行**

19c前半 **自由貿易の確立** 東インド会社の対インド貿易独占権廃止 (1813)

●植民地支配の強化
ザミンダリー制 (ベンガル州など北インド)
ライヤットワリー制 (マドラス州など南インド)

← イギリス ← **東インド会社** → インド

綿花・藍

綿製品

●インド伝統の農村共同体社会の破壊
●イギリス綿布の流入によるインド手工業衰退
●近代的税制の導入による税負担増加

シパーヒーの反乱とイギリスの直轄支配

1857 **シパーヒー(セポイ)の反乱**

1858 **ムガル帝国滅亡**

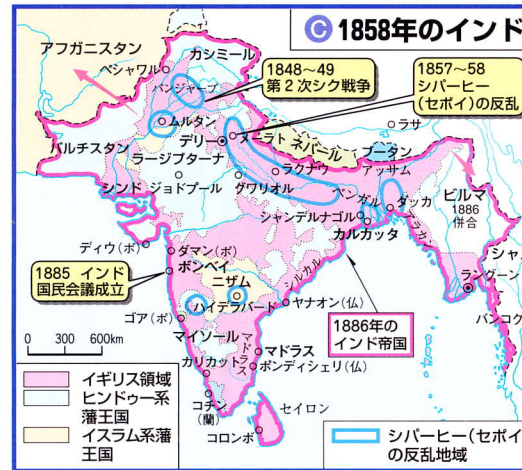
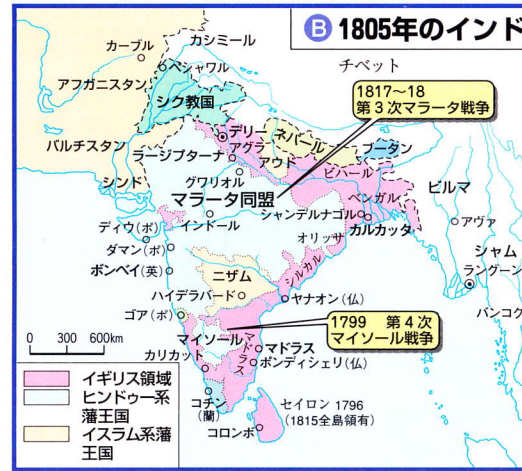
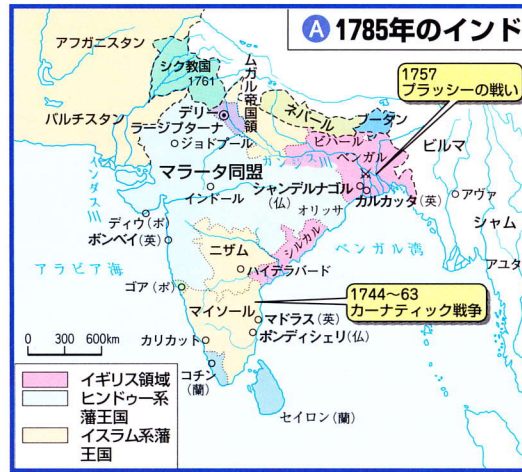
↓
東インド会社解散と本国の直轄支配 (1858)

← イギリス ← 綿花・藍 → インド

綿製品

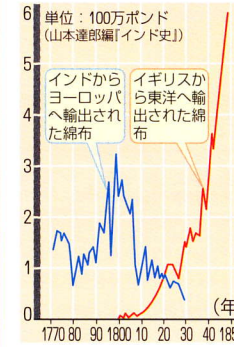
●直轄支配の完成
インド帝国の成立 (1877)
ビルマ併合 (1886)

●インド人懐柔策
インド国民会議 (1885 ボンベイで結成)

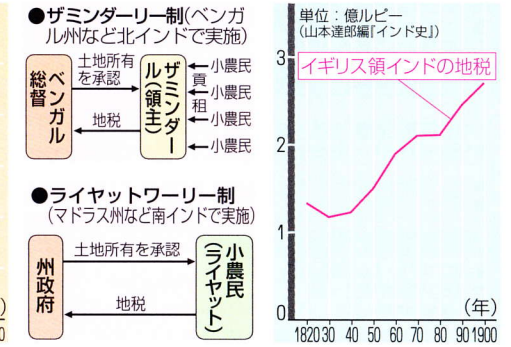


2 インドの経済・社会の崩壊

A インドの貿易



B イギリスのインド地稅収奪

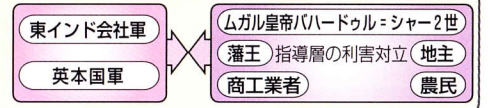


▶ **解説** 産業革命後のイギリスから安価な機械製綿布が流入したことによりインド土着の手工織綿布産業が衰退。また、イギリスが18世紀以来導入した近代的税制により税負担が増加した。イギリスによるインド支配の拡大は、伝統的なインドの農村共同体を破壊していった。

シパーヒー(セポイ)の反乱

— 文化的背景 —

東インド会社のインド人傭兵シパーヒー(セポイ)は、上層イスラム教徒や高位カーストのヒンドゥー教徒からなる。反乱の直接原因の薬包使用拒否事件は、シパーヒーに配られた銃の薬包に牛と豚の脂が塗られているといううわさから起こった。それは西欧キリスト教文化に伝統的インド社会を破壊されたヒンドゥー・イスラム教徒の文化的反抗でもあった。



ラクシュミー=パーイー (1835~58)

シパーヒーの反乱の指導者の1人であった小王国の王妃ラクシュミー=パーイーは、英軍に敗れたが今も民族的英雄として人々に慕われている。

● **ヴィクトリア女王**

● **ヴィクトリア=メモリアル** 1905年、インド皇帝を兼任したヴィクトリア女王を記念して、インド総督カーゾン卿(ベンガル分割令の立案者)がカルカッタで起工(1921年完成)。白亜の大理石製建造物で、現在は美術館・博物館になっている。